

フレーム分析の諸相と課題

——メディア論と社会運動論におけるフレーム分析の統合的検討

坂 本 佳鶴恵

1. ねらいと構成

フレームという概念は、さまざまな領域で用いられている。フレームの研究は、特に認知心理学と、それに影響を受けつつ独自に展開していった社会科学およびマス・コミュニケーション研究を中心としたメディア論、社会運動論などの人文・社会科学領域における研究において大きく発展し、当該分野で共有される理論や分析方法を生んでいる。しかしそれらを領域を超えて俯瞰して検討し、共通の概念やありかた、各領域の研究と他領域の相互関係などを論じたものはあまりない。

本稿では、政治コミュニケーションの一部として論じられることも多いメディア論と社会運動論のフレーム、フレーミングの研究を中心に、その展開を検討し、共通の問題や課題を論じる。

まず、メディア論、社会運動論におけるフレーム、フレーミング概念の基礎となった研究とそれらに影響を与えた認知心理学の研究を述べ、次に、さまざまな分野を統合するパラダイムとして、フレーム概念の明確化とフレーム分析の共有を主張したEntmanの議論を紹介する。そして、実証的研究が蓄積されていったメディア論と社会運動論におけるフレーム、フレーミングの使われ方を検討し、社会科学やコミュニケーション研究におけるフレーム分析の共有可能性や課題について検討する。

なお、本稿では最初のフレーム概念の提唱者として一般的に言及されるGoffmanにならって、フレーム概念をもちいた研究の総体をフレーム分析frame analysisと呼ぶが、メディア論などでしばしば用いられるフレーミング研究framing researchという言葉もそれらの領域の研究の説明においては用いることにする。

2. フレーム概念と初期のフレーム分析

フレームは、社会学、政治学、メディア論、認知心理学、言語学、経済学、文化人類学などさまざまな分野で用いられているが、社会科学およびメディア論で論じられるフレームという概念の最初の提唱者とされているのは、BatesonとGoffmanである。Batesonは、数学の集合論と実生活における絵の額縁という二つのアナロジーを使いながら、ある状況をメタコミュニケーション的に指示し、地と図を区別するものとして、フレームという言葉を用いた（Bateson 1972=2000:267-77）。生活の一部分を他と区別して独自のルールが適用される状況、たとえば、遊び、夢、映画、面接、仕事、ゲームなどが指示されフレームとなる。

GoffmanはBatesonのフレーム概念を、状況を定義する際に用いる組織化の原則とし、具体的な対面的相互作用の分析に適用した（Goffman 1974）。フレームは、状況に参加している成員の経験を組織化し、

境界づけ、状況への関与のしかたを示す。Goffmanは特にフレームを転調し書き換えるkeying作業、たとえば、状況の成員間で、いまおこなわれている取っ組み合いが、「喧嘩」なのか「遊び」なのかというフレームが変更されることに注目した⁽¹⁾。

メディア論では、Tuchmanが窓枠のメタファーを用いて「ニュースを一つの枠組みとして扱い」(Tuchman 1978=1991: 3)、ニュースを制作する組織が生み出す制度や慣習など、ニュースの送り手によるニュースの構成のしかたを、ニュースのフレームとして分析した(同)。

またGitlinはTuchman やGoffman に言及しつつ「おおむね語られず気づかれずに、報道するジャーナリストとその報道に依存している私たち双方の世界を組織する」「メディア・フレーム」を、「シンボルを扱う人が、言葉であれ映像であれ言説を規則的に組織化する際に用いる認識、解釈、提示、選択、強調、排除の持続的パターン」とした(Gitlin 1980: 6-7)。そして、1960年代後半のベトナム反戦運動についての報道が、運動を瑣末化したり内紛を強調したことなどを「フレーミング装置」と呼び、その主張のリアリティを弱体化させていったことを指摘した(同)。

Gamsonらは、Goffmanのフレーム概念を引用し、政治コミュニケーションの研究に用いてみせた。フレームは「認知心理学におけるスキーマと同じ役割をメディア言説において果たす概念」とし「多様なシンボルの配列にしっかりとした一貫性と意味を与える中心的な組織原理」としている(Gamson, et. al. 1992: 384)。フレームという概念には「絵画の額縁」という意味と「建物の骨組み」という意味があるように、境界を意味する場合と潜在的構造を意味する場合がある。また、フレームという言葉で示される抽象性―具体性のレベルはさまざまである。フレームは変化していくことにも注意しなければならない(同: 385)。Goffmanのフレーム概念に「構造と行為者の有益な緊張とバランス」をみたGamsonらは、フレーミングが文化や組織と個人の認識を架橋すると考えた。

Gamsonらはスリーマイル島の原発をめぐるテレビニュース、雑誌報道、風刺漫画、意見欄の分析に、Gitlinの「メディア・フレーム」という概念を用いている。「このフレームは、典型的には複数の立場を内包し、ある程度の矛盾も含んでいる」(Gamson & Modigliani 1989: 3)。また「メディア・パッケージ」という言葉が使われ、たとえば、原発を人類の進歩とする語り方などのパッケージは「核心となるフレームと複数の立場を示唆する多くの異なる濃縮されたシンボルを提供し、全体として一つの巧みなキャッチフレーズや比喩、あるいは象徴的な装置として提示されることが可能となる。」(同)

社会運動論においては、SnowらがGoffmanの「解釈図式」というフレーム概念を引用し、フレームを「個人がその生活空間や社会全体の中で起きたことを位置づけ、認識し、特定し、ラベルづけることを可能にする解釈スキーム」(Snow, et. al. 1986: 464)と規定して、運動組織による構成員や潜在的な支持者の動員の過程と関係づけた。

このように、フレームという概念を用いて最初に具体的な分析をおこなったGoffmanは、対面的状況において状況の構成員がどのようにその場を定義し、行動していくかという分析をおこなったのだが、Goffmanに触発されて、その後フレーム概念を用いた分析を展開していったメディア論や社会運動論においては、フレームはテキストの解釈枠組みであったり、運動組織のスローガンやキャンペーン、人々の一般的な認識や語り方に適用されるようになり、その場の状況を超えて、テキストや人々における一般的な状況定義や認識を示すようになった。

フレーム分析はフレームがどのようなものであるかというだけでなく、フレームを形成あるいは変化させるフレーミングの過程とそれが与える影響に注目が集まり、フレーミング研究が盛んとなる。本稿ではメディア論・社会運動論におけるフレーム分析に限定し、膨大な認知心理学の実験研究には立ち入らない

が、認知心理学のフレーミング効果の実験は、これら人文社会科学におけるフレーム分析にも影響を与えた。

Kahneman と Tversky の代表的な実験では、被験者に以下のような質問をした(Kahneman & Tversky 1984)。

アメリカにおいて尋常でないアジアからの病気に備えるとする。その病気は600人死ぬことが想定され、これに対してAとBの二つの対策が提案されている。Aだと200人が助かる。Bだと1/3の確率で600人助かるが、2/3の確率で誰も助からない。AとBどちらを選ぶべきだと思うか。これに対して被験者のうち72%がAを選び、28%がBを選んだ。

次の実験では、被験者に対して同じ状況を設定し、同じ対策を異なる言い方(CとD)で提示した。

対策Cでは400人が死ぬ。Dでは1/3の確率で死ぬ人がゼロだが、2/3の確率で死ぬ人が600人である。CとDどちらを選ぶべきだと思うか。

AとC、BとDは言い方は違うが同じ効果をもつ対策である。しかし、被験者のうちCを選んだ人は22%に過ぎず、Dを選んだ人は78%で、AとBの場合と意見が逆転したのである。

この実験は論理的には同じでも表現のしかたが異なると異なる結果をもたらすフレーミング効果として知られることになり、人文・社会科学のフレーム分析にも影響を与え、メディア論において、送り手のフレームあるいはテキストの内部で作用するフレームと、オーディエンスや受け手の心のなかで働くフレームとの違いに目を向けさせた⁽²⁾。

3. Entmanのフレーム・パラダイム論

Entmanは、フレーム概念を用いたこれらの研究に言及し、共通のパラダイムを設定し、フレームの定義や方法を共有するよう呼びかけた。Entmanはフレーム、フレーミング、フレームワークという言葉が、人文・社会科学で広く使われているにもかかわらず、定義されず、しかし暗黙の了解としてほぼ同じ意味で使われてきたと指摘している。「フレーム概念は、どんな使われ方にせよ、絶えずテキストをコミュニケーションする力を描写するのに使われてきたのであり、フレームの分析は、ある場所（たとえばスピーチ、発言、ニュースレポート、小説など）からその意識への情報の伝達（コミュニケーション）によって、人間の意識がまさに影響されるやり方を示してきた」(Entman 1993: 51-2)。

「これらの用語の規定と共通の傾向を明らかにし、より正確で広範な理解」(同: 52)を目指したEntmanは、「フレームは基本的に選択と顕出である。フレームすることは、認識された現実のある側面を選択し、コミュニケーションするテキストにおいてより顕著にすることである。それは、特定の問題を定義したり、因果の解釈をしたり、道徳的評価をしたり、描かれている事柄の取り扱い方を推奨したりするような方法でおこなわれる」(同: 52)としている。Entmanは、フレームを選択と顕出ととらえ、問題を定義し、その原因を診断し、道徳的判断をし、対処法を示唆することに注目した。

フレームは、コミュニケーション(送り手)、テキスト、受け手、文化という4つの場所で考えられねばならない。「コミュニケーションは意識的、無意識的にフレームによる判断と誘導をしている。テキストは、フレームを含み、特定のキーワードやフレーズ、ステレオタイプ化したイメージ、情報源、特定の事実や判断を強化する文章などがあったりなかったりする。フレームは受け手の思考を導き、受け手はテキストのフレームやコミュニケーションの意図を反映したりしなかったりする。文化はフレームを共通して引き起こす貯蔵庫である。」(同)

Entmanは、研究者たちが一貫したフレーム/フレーミング概念を共有することで、多数派が支持する社会の「支配的意味」とは何なのか、どのように測定するのか、オーディエンスは「支配的意味」にどのように影響されたり自律的であるのか、エリートと世論とはどのような関係にあるのか、などの問題に貢献できるとし、フレーム/フレーミングの分析をコミュニケーションの研究パラダイムとして確立することを提案したのである。

以下では政治コミュニケーションにおけるメディア論および社会運動論のフレーム分析をもとに、共通の研究パラダイムの確立というEntmanの問題提起をどのように引き継げるかを検討する。

4. 政治コミュニケーションとしてのフレームとフレームの種類

内容的にみると、メディア論ではニュースや政治的な報道の分析を中心にフレーム概念を用いた分析がなされてきた。NelsonとWilleyは「フレーム研究のほとんどが、フレーミングを政治コミュニケーションの一つの構成要素とみている」としている。また、送り手と受け手双方の分析もあるものの一般的な傾向として、受け手の分析が少ないと述べている (Nelson & Willey 2001 : 245)。

NelsonとWilleyは政治コミュニケーション研究におけるフレームを、「集合行為フレームcollective action frame」、「決定フレームdecision frame」、「ニュースフレームnews frame」、「争点フレームissue frame」の4つに分類している。

集合行為フレームは、社会運動における動員に関わるフレームである。9で後述するような「フレーム調整」等による動員が語られる。出来事や状況は、重要な関心や価値に挑戦する不正な行為として、効果的にフレームづけられなければならない。

決定フレームは、心理学における課題のワーディングによる被験者の認知の変化を示す。KahnemanとTverskyに始まるプロスペクト理論は、決定すべき問題の利得の側面が強調されて表現された時には、ほとんどの被験者がリスク回避的な選択をし、損失の側面が強調されて表現される時には、ほとんどの被験者がリスク志向的な選択をすることを報告している (同)。

ニュースフレームと争点 (イシュー) フレームは、メディア論で論じられている。ニュースフレームは、ニュースにおけるメッセージの枠づけに関するものであり、争点フレームは、特定の争点を論じる視点を示す。

ニュースフレームの代表例として、選挙・政治報道における「ゲーム」対「実質的内容」フレーム (Patterson 1981)や「戦略型」対「争点型」フレーム (Cappella & Jamieson 1997)、後述する社会問題報道における「エピソード型」対「テーマ型」フレーム (Iyengar 1991) などがあるが、これらはメディアの組織上の慣行や営業上の必要に起因する。他方、争点フレームは個別の争点に特化したものであり、おもにメディアより政策決定者や利益団体の広報担当者などニュースソースに起因する (Nelson & Willey 2001、竹下 2008)。竹下は、ニュースフレームに対しては大雑把な二項対立フレームに依拠することによる過度な単純化や受け手のフレームの問題が看過される危険性を、争点フレームについては一般化しにくいという問題点を指摘している (竹下 2008 : 245)。

5. メディア論における3つのフレーム・パラダイム

ニュースフレームと争点フレームを扱うメディア論では、Entmanの論文を受けてD'Angeloがマス・

コミュニケーションのフレーム分析の整理をおこない、1つのパラダイムではなく、「認知的」「構築主義的」「批判的」の3つのパラダイムが存在するとした。「認知的パラダイム」は、認知心理学に出自をもつフレーム理論を基礎とし効果研究のフレーム分析をおこなうものであり、「構築主義パラダイム」は、メディアとオーディエンス間の相互作用によって意味が構築される側面を重視する。他方、「批判的パラダイム」は、政治・経済的エリートの視点からの情報を、ジャーナリストが習慣的に編集する結果出てくるものとしてフレームをとらえる。

D'Angeloは、3つのパラダイムがフレームの分析のしかたの違いにより、一定の偏向をもつことを指摘している。批判的パラダイムは、ニュースを作る組織が、ある情報を選択し意図的に他の情報を除外すると議論するのに対して、認知的パラダイムはジャーナリストが日常的に異なるフレームを作っているため、ジャーナリストが複数の情報提供への要求に応じているとみなしがちである。批判的パラダイムはフレームによって、どのように公的な意見が全体として一方向に傾くかを見がちであるのに対して、認知的パラダイムは、フレーミング効果の実験によって、対象者が複数のフレームに接することができると想定することになる。

批判的パラダイムは、個人の解釈を認めつつも、最終的には、ニュースのフレームが政治的意識を拘束していると考えのに対して、認知的パラダイムは、個人が柔軟にフレームを解釈できると想定しており、そのようなバリエーションが出てくるように研究の設計をおこなうのである。構築主義的パラダイムは、ジャーナリストを政治的な発起人（たとえば情報源）の解釈のパッケージを作る処理装置であると捉え、その過程で、特定の市民の機会が阻害されることに目を向ける。構築主義的パラダイムは批判的パラダイムと異なり、フレームを、市民たちが意見を形成するために使用せねばならない「道具一式」とみなしている（D'Angelo 2002：876-7）。

6. メディア・フレームの研究事例

4で述べたようにメディア論では、ニュース・フレーム、争点フレームのいくつかのフレームの類型が明らかにされている。ここでは認知的パラダイムと構築主義的パラダイムの2つのパラダイムを用いたこれらのフレームの分析事例を通して、メディア論におけるフレーム分析の多様性をみておく。認知的パラダイムの研究事例として、しばしば引用されるニュース・フレームであるIyengarの「エピソード型」対「テーマ型」の研究を、構築主義的パラダイムの研究事例として、一般化しにくい争点フレームについて一般的なフレームの提案に取り組んだNeumanらの研究事例をとりあげる。なお、批判的パラダイムについては1980年のGitlinの研究以降は、両者に比して具体的な方法や成果で知られる研究があまりないため、ここでは割愛する⁽³⁾。

Iyengarは政治的問題についてのテレビニュースを、特定の出来事や事例を具体的にとりあげる「エピソード型」と一般的な文脈でとらえる「テーマ型」のフレームに分け、責任の帰属を中心に、人々の意見にどのような影響があったかを調べた。方法論的には、ニュースの内容分析、フィールド実験、全国調査の分析が用いられた。内容分析によって「エピソード型」か「テーマ型」かを判定し、実験によって、どちらかの型のニュースをみせられた被験者の、責任の帰属をめぐる影響のされ方を測定し、全国調査によって、責任の帰属と政治的意見との一般的な関係をみている。

対象は1981～86年の犯罪・国際的テロリズム・貧困・失業・人種問題についてのニュース報道である。貧困・犯罪・テロリズムは「エピソード型」が多く、失業は「テーマ型」が多い。実験では失業問題を除

いて、「テーマ型」は政府や社会に責任を帰属する割合が増加し、「エピソード型」には逆に個人に帰属されやすい効果がみられた。人種による違いもみられた (Iyengar 1991)。

Neumanらは、メディアの構築主義の立場から、メディアとオーディエンス双方の争点フレームを検討した。意見ではなく、人々が何を知っているのか、その考え・感情・信念をどのように作り上げたかを含む「共通知識」に焦点をあて、質問紙調査、内容分析、深層面接、学習効果についての実験などの方法を用いて、「何が政治に関する共通知識を構成し、どのようにメディアが人々と相互作用を行って“外界”についての共通理解を作り上げるか」についての図式を提供した (Neuman, et.al. 1992=2008: 4)。

Neumanらは1985年から1987年のアメリカで報道されたニュースから南アフリカのアパルトヘイト、スターウオーズ計画、1987年10月の株式市場暴落、薬物乱用、エイズの5つの争点(イシュー)を設定し、テレビ・報道雑誌・新聞における報道パターンを比較した。そしてこれらの争点について、対象者の知識と学習のしかたに関する実験と質問紙調査、一般的なイメージやニュースの影響を探る半構造化インタビュー(深層面接)をおこない、経済や金儲けに言及する「経済フレーム」、いくつかの陣営の対立としてみる「対立フレーム」、巨大な力に対する無力な存在としてみる「無力感フレーム」、個人的な描写を加えることで人間の側面を強調したり個人的な同情や関心を表明する「人間への影響フレーム」、道徳的価値や解釈に言及する「道徳性フレーム」の5つの主要なフレームが、メディアとオーディエンスの双方にみられることを導き出した。

Neumanらによれば、これら5つのフレームはメディアとオーディエンスの間で使用される頻度が異なる。メディアでは対立が強調される(対立フレームが29%)のに対して、深層面接では非常に少ない(6%)。深層面接ではメディアよりも「人間への影響フレーム」と「道徳性フレーム」が多かった(同)⁽⁴⁾。

この2つ事例は、認知的パラダイムは同じ内容の異なる表現の効果に注目し、メディア論における構築主義パラダイムはメディアとオーディエンスの認識のしかたの相互関係に注目していることを表している。また、フレーム概念が説明変数として用いられる場合と、被説明変数として用いられることの双方があるということも表している。すなわちフレームを問題の原因や責任を社会や構造に帰属するのか、あるいは当事者である個人に帰属するのかを説明する概念として用いる場合もあれば、メディアとオーディエンスがそれぞれどのようなフレームを構築し、両者がどのように関係しているのかをみるというような研究もある。

7. フレーミング・プロセス・モデルとフレーミング効果

フレームの形成過程と効果という観点からの整理もある。フレームは、とりわけマスメディアが受け手(オーディエンスや読者)に対してもつ効果に着目して使われる。Scheufeleは、フレーミングの概念はより大きなメディア効果研究の文脈のなかに埋め込まれているとし、メディア効果のフレーミング研究を、メディア・フレームかオーディエンス・フレームかという次元と、説明変数に使っているか従属変数に使っているかという二つの次元で分類している。

さらにScheufeleはフレーミング過程のモデルを提案し、フレーミングを、「フレーム形成 frame-building」、「フレーム設定 frame-setting」、「個人レベルのフレーミングの効果」、個人のフレームとメディアのフレームの結びつける「受け手としてのジャーナリスト」の4つからなる過程とした (Scheufele 1999)。

De VreeseとLechelerは、フレーミング研究をニュースの内容と効果を調査するにあたってもっとも人

気のあるアプローチの一つとし、Scheufeleなどを参照して、ニュースのフレーミング過程を、フレーム形成、フレーム設定、フレーミングの個人的社会的帰結、としている(De Vreese & Lecheler 2012 : 293)。

フレーム形成は、ジャーナリストたちやニュース組織の争点の枠づけ方を決めるジャーナリズムの内的な要因(ニュース価値や編集方針など)やジャーナリストとエリートたち、社会運動の絶え間ない相互作用で起こる外的な要因などによって、メディアのフレームが生み出される過程である。フレーム形成過程の結果生み出されるのがニュース・テキストのフレームである。

フレーム設定は、メディアのフレームとそれ以前からの個人の知識や傾向等とが作用する過程である。ニュースのフレームは、オーディエンスが出来事を学び、解釈し、評価することに影響する(De Vreese & Lecheler 2012)。

8. メディア論における位置づけ：議題設定研究との関係

メディア論では、フレーム概念が導入される以前の1960年代末から、マス・メディアの効果を認知レベルでとらえようとした研究として、メディアが議題を設定する機能agenda-setting functionと世論との関係をみる議題設定研究がなされてきた。竹下は、それまでのメディア研究が、メディアが受け手の既存の態度を変化させようかどうかという説得効果を中心になされてきたのに対して、1970年代に、受け手の態度レベルではなく認知レベルに視点を移すことでメディアの効果を再評価する流れが出現し、その代表格が議題設定効果であったと述べる。議題設定研究は、マスメディアが人々が何を考えるのかよりもむしろ、何について考えるのかを規定すると視点を変えたことで、メディアの効果研究を再活性化させた(竹下 2008 : 4)。

議題設定機能は、争点(イシュー)やトピックの重要性や顕出性に関わる。因果命題にすれば「マスメディアで、ある争点やトピックが強調されればされるほど、その争点やトピックに対する人びとの重要性の知覚も高まる」ということになる(同)。

Scheufeleが前節で述べたフレーミング・プロセス・モデルを考える際、メディアの議題設定研究を参考にした(Scheufele 1999)ように、議題設定研究は認知レベルに注目したという点で、フレーム分析に近いものである。竹下は、1990年代以降、マスコミュニケーション研究の研究者の間でフレームないしはフレーミング(フレームを状況に適用する行為)という概念が広く注目を集めるようになったと述べ、それまでの議題設定研究が争点だけを問題としたのに対して、フレーミング研究が争点の内実を検討する特徴に注目している(竹下 2008 : 243,272)。藤田は竹下に同意しつつ、フレーミング研究を議題設定研究を補うものとしている(藤田 2007)⁽⁵⁾。

9. 社会運動論におけるフレーム分析

では集合行為フレームを扱う社会運動論においてはどのようなフレーム分析がなされているのだろうか。すでに述べたようにSnowらはフレーム概念を社会運動論に適用し分析方法として位置づけた。「集合行為フレームcollective action framesは、『世界で起こっていること』を濃縮し単純化する機能をもっており、潜在的な賛同者や成員を動員し、傍観者からの支持を醸成し、敵対者を解体する。このように社会運動組織(SMO)の活動とキャンペーンを正当化し鼓舞する信念と意味のセットである。」(Benford & Snow 2000 : 614)

社会運動論では、フレームは集合行為フレームとして運動への動員との関係で用いられ、構築主義的アプローチが中心となっている。Benford と Snowは、集合行為フレームを心理学的スキームのような静的概念とみることを批判し、運動のフレーミング過程における相互作用、構築主義的性格を強調している。Gamsonを引用しながら、スキームなどの認知的フレームとの違いを「集合行為フレームは、たんに個人的な態度や知覚ではなく、共有された意味の交渉の結果である」とする（同）。

濱西は社会運動研究を、運動の因果的メカニズムを説明する「説明アプローチ」と運動の意義を概念枠組みにもとづいて解釈する「解釈アプローチ」に区分したうえで、構築主義が初期資源動員論などの説明アプローチに影響を及ぼし、フレーミング論を生み出してきたと述べる（濱西 2019）。フレーミング論は、社会運動に必要な組織戦略やその展開のために必要な資源の収集と配分といった観点に対して、参加者・潜在的参加者などがどのように運動を理解・解釈し、運動に共鳴し、動員にいたるのかという観点を加えたのである。

Snowらは、「個人と社会運動組織の解釈的志向をつなげる」ことを「フレーム調整frame alignment」と呼び（Snow & Benford 1986 : 464, 467）、「フレーム架橋Frame Bridging」、「フレーム増幅frame amplification」、「フレーム拡張frame extension」、「フレーム転換frame transformation」の4つのフレーム調整過程の類型をあげている。運動への動員の過程は、こうした社会運動組織の解釈フレームの調整によって達成される。フレーム架橋とは、「イデオロギー的には一致するが構造的にはつながっていない2つかそれ以上のフレームをつなぐ」こと、フレーム増幅とは、「特定の問題や一連の出来事に関する解釈フレームを明確化し、活性化すること、フレーム拡張とは、潜在的支持者のためにフレームを拡張すること、フレーム転換は、解釈フレームや価値観を変えることである（Benford & Snow 2000）。

集合行為フレームは、初期には運動組織のどのようなフレームが支持を得たのかという「文化的フレーミング」を中心に議論された（西城戸 2003）が、その後こうしたフレーム調整過程の類型等を用い、なぜ、どのような過程によって、運動組織のフレームが支持されるようになるのかという研究が多く出ている⁶⁾。

10. フレーム分析と社会問題の構築主義

フレームは社会問題の構築主義とも関係がある。メディア論における構築主義とは別に、社会学においては1970年代から「社会問題の構築主義」という流派が存在している。社会学における「構築主義」の使用法には、人々の行為や言説の相互作用による社会的意味の構築一般に注目する立場を指す広義の社会構築主義と、そうした立場を社会問題の分析に適用し、独自の社会問題の理論と分析手法を発展させた、狭義の「社会問題の構築主義」がある。

そもそもフレーム概念の創始者と言及されることが多い社会学者のGoffmanは、人々の解釈や意味づけに注目した象徴的相互作用論symbolic interactionismの流れを汲んでいるが、社会問題の構築主義も、こうした象徴的相互作用論にはじまる社会学理論の「解釈的パラダイム」（坂本 1987→2005）の発展のうえにある。つまり、フレーム分析は、社会的相互作用によって社会的意味が構築されるとする広義の構築主義および社会問題の構築主義と近い関係にある。

また、社会問題の構築主義と社会運動論も近い関係にある。1980年代にはMaussが社会問題の構築主義を社会運動論の一部と位置づけ、これに対してTroyerが両者に相違があることを主張するなど、社会問題の構築主義と社会運動論との関係をめぐって論争も起きた（濱西 2019）。ここでは、社会問題の構築主義の代表的研究者として知られるBestが社会問題の構築主義と、社会運動論におけるフレーム分析を

どう位置づけているかをみておこう。

Bestは社会問題の構築主義とフレーム分析を取り込んだ社会運動論は重なるという。社会問題の構築主義者は、社会問題を、ある状態としてではなく、人々が問題となるような状態と定義するようになる社会的過程ととらえる。それは行為者が、問題があるとクレーム申し立て claimsmaking する過程に注目する。すでに社会に存在する問題についての研究ではなく、人々が常に何が問題か、何がなされるべきかを定義し、定義しなおす過程を社会問題の本質ととらえるのである。クレーム申し立ては社会運動組織によってなされることも、専門家や科学者、政府機関所属の人や政治家など運動組織以外の人々からなされることもあるが、運動組織以外からのクレーム申し立てであっても、長続きするためには運動組織が外からのクレーム申し立てを取り込むことが重要である。一回のサイクルの相互作用で社会問題が解決することは稀であり、長期になるほど運動組織の役割が重要となる (Best 2013)。

こうしてBestは、社会問題の研究者が社会運動論の先端的理论から多くを利用することができるとしている。フレーミングはクレーム申し立ての一形態であり、社会問題のレトリック分析の、前提・論拠・結論は、社会運動論の診断フレーム・動機フレーム・予測フレームとパラレルである。また、社会運動論のメディア・パッケージも社会問題の構築主義のメディア実践に似ている (同)。

BestはMaussらとは逆に、社会運動の活動を社会問題の過程の一部としてとらえられるとし、社会問題の構築主義と社会運動論は相互補完的であるとするのである。本稿では、社会問題の構築主義と社会運動論のどちらがどちらを包含するかという議論にはくみしないが、いずれにせよ、社会運動論におけるフレーム概念の導入は、社会運動論と社会問題の構築主義との距離を近づけ、また社会問題の構築主義の分析は、フレーム分析の観点から検討することが可能であり有用であることを確認しておきたい。

11. 考察

ここまでみてきたように、メディア論と社会運動論のフレーム分析はともにGoffmanのフレーム概念を出自とし、広い意味ではフレーム概念を共有している。

しかし、メディア論のなかでもフレーム分析は多様で、フレームの研究には、人々がもつ (形成する) 状況の定義をフレームと呼ぶ場合、そうした状況の定義を生み出すジャーナリストなどの活動のルールやフォーマットをフレームと呼ぶ場合、その結果生み出されたテキスト等のフォーマットや表現のしかたをフレームと呼ぶ場合があった。

またD'Angeloがジャーナリスト、オーディエンス、争点、ニュース/テキストの4つのフレームのタイプがあるというように (D'Angelo 2009)、メディア論では送り手であるジャーナリスト、その活動の結果であるニュース (テキスト) や争点 (イシュー)、受け手であるオーディエンスの4つのレベルでフレームが考えられてきたといえる。さらにフレームが受け手である人々に与える影響を研究する認知的パラダイム、フレームの相互作用的構築をみる構築主義的パラダイム、フレームを通じた権力の作用に焦点をあてる批判的パラダイムの3つのパラダイムの存在も指摘されている。

こうしたメディア論におけるフレーム分析の分類やモデルは、社会運動論のフレーム分析にも適用できる。社会運動論も、送り手である社会運動組織と受け手である参加者 (潜在的参加者・敵対者・傍観者が含まれる場合もある) の間で、特定の争点をめぐってフレームがどのように構築され、変化し、影響を与え、動員がなされていくのかという研究がなされてきたとみることができる。

フレーミング効果の研究を、認知的、行動的、情緒的効果の研究に分類する (De Vreese & Lecheler

2012)ならば、社会運動論におけるフレーム分析は、メディア論がフレーミングによる認知や評価、態度変容を中心的に研究してきたのに対して、行動変容に焦点をあてた影響・効果の研究といえるだろう。

メディア論では、ジャーナリストらによる一般的なフレームの形成とその作用に関心をもつ研究が主流であるのに対して、社会運動論では個別の争点をめぐる運動組織のフレームと、さまざまな立場の受け手との関係に着目する。しかし、フレームという概念を用いずに展開してきた社会問題の構築主義も含めて、メディア論、社会運動論などの政治コミュニケーションのフレームは、その方法は多岐にわたるが、マス・メディアやさまざまな媒体におけるテキストや言説が、ジャーナリストや行政や運動組織などによって生み出される過程、およびテキストや言説のフォーマットや表現の形式、それが受け手に与える影響や相互の影響関係の研究という点では共通している。

関心や目的の違いを超えて、Entmanが述べたように、社会の支配的意味の形成や変容、その影響、さらにそれに対抗する意味の形成や変容、それらが個人や社会に与える影響の分析などに貢献するという点で、領域を超えたフレーム概念や分析方法を共有し、検討していくことには意味がある。また、SNSのように一方的コミュニケーションではない多数のテキストの相互作用、相互影響を考えると、社会運動論とメディア論におけるSNSのフレーム分析は重なりあい、補完できる部分も大きいと思われる。

領域を超えてフレーム分析を議論するには、まず何をフレームとして設定し、何を明らかにしようとしているのかを明確にする必要がある。どこに存在するフレームを対象とするのか、すなわち、さまざまな種類のテキスト、制度、組織、個人などの送り手、受け手の、どこにみられる何をフレームとするのかを明確にしなければならない。そして、フレームのフォーマット・構成の分析なのか、フレームの形成・構築の分析なのか、フレームの影響・効果の分析なのかという、フォーマット、形成（構築）、影響（効果）のどの問題に取り組んでいるのか、あるいはどの問題間の関係に言及しているのかという点を明確にして議論する必要がある。その上で、既存の領域や方法論のなかだけでなく、対象や問題ごとに、領域を超えたフレーム分析の参照と成果の取り入れ、利用が推進されるべきだろう。

12. 結論

本稿では、メディア論や社会運動研究などにおけるフレーム概念を用いた分析を中心に、フレームやフレーミングがどのように用いられ、研究されてきたかを概観し、それらがそれぞれの領域でどのように位置づけられているかを検討した。そしてニュース・テキストの表現のしかたやその効果、ジャーナリストらによるニュースのフォーマットの形成、人々の争点に対する表現や学習とニュースの影響、社会運動組織の動員のしかた、社会問題のクレームなど、具体的なテーマは多様であるが、メディア論における分析の整理が他領域にも有効であること、送り手・受け手・争点あるいはテキストの、フレームのフォーマット・構成、フレームの形成・構築、フレームの影響・効果として統合的にみることによって、さらなる研究の進展に貢献しあう可能性があることを指摘した。

本稿では触れられなかったが、そもそもGoffmanのフレーム分析が政治とは関係なかったように、フレーム分析は、政治コミュニケーション以外のさまざまなテーマにも適用されている。また、社会問題の社会学以外にも、フレームという用語を用いずにおこなわれている近接する研究もある。これらを含めたさらなるフレーム分析の検討も必要である。

注

1. こうしたGoffmanの対面状況を規定する集合論的なフレーム概念を難波は広告の一般的状況の分析に応用している（難波 1993）。
2. (Entman 1993) (Cappella & Jamieson 1997=2005 : 69) (藤田真文 2007) など参照。
3. 鳥谷は、批判的パラダイムはほかの2つのパラダイムのような内実を備えておらず、むしろアプローチと呼ぶような状況であること、今日認知心理学に出自をもつ認知的パラダイムが、最大勢力となっており、構築主義や批判的パラダイムによる、マス・コミュニケーション研究の中核にあった効果研究への批判的、オルタナティブな視点が忘れられているとしている（鳥谷 2016）。
4. メディアでは「人間への影響フレーム」と「道徳性フレーム」は18%と4%であったのに対して、深層面接では36%と15%であった（Neuman, et.al. 1992=2008 : 101）。
5. 竹下は、議題設定研究を詳細に検討し、その流れのなかからも1990年代になると「属性型議題設定研究」と呼ばれる、下位の争点や側面に目を向けたフレーミング研究に近いものが出てきていることを指摘し、フレーミング研究との異同を論じている（竹下 2008）。またMcCombsとShawは、議題設定がそれまでの何について考えるべきかというだけでなく、それをどう考えるべきかというフレーム選択を含むものとしている（McCombs & Shaw 1993）。鈴木はGamsonとModiglianiの研究（Gamson & Modigliani 1989）を例に、メディア・フレーム概念を属性型議題設定と比較し、ある争点の属性がより重要性を与えられ強調されている場合、争点の全体をメディア・フレーム、それに基づいて設定される属性を属性議題としている（鈴木 2000）。
6. 日本におけるこうしたフレーム類型を用いた分析には、たとえば「在日特権」フレームと排外主義運動への参加の関係のミクロな動員過程を、インタビュー調査をもとに4つのフレーム類型を用いて詳細に分析した研究（樋口 2014）、「札幌市パートナーシップ宣誓制度」について、2つ以上のフレームをつなぎ問題意識がない人々が理解するための枠組みを与える「フレーム架橋」と解釈フレームを明確化し活性化する「フレーム増幅」を組み合わせた「フレーム伝播」が、SNSをつうじて起こったとする研究（横尾 2019）などがある。

引用文献

- Bateson, G., 1972, *Step to an Ecology of Mind*, New York: Ballantine Books (= 2000, 佐藤良明訳『精神の生態学』新思案社)
- Benford, R.D. and D.A. Snow, 2000, "Framing Processes and Social Movements : An Overview and Assessment," *Annual Review of Sociology*, 26 : 611-39
- Best, J., 2013, "Social Problems and Social Movements" D. A. Snow et al. eds. *The Wiley-Blackwell Encyclopedia of Social and Political Movements*, Malden, Mass: Wiley-Blackwell
- D'Angelo, P., 2002, "News Framing as a Multiparadigmatic Research Program: A Response to Entman", *Journal of Communication*, 52(4) : 870-888
- D'Angelo, P., 2019, "Framing Theory and Journalism", *The International Encyclopedia of Journalism Studies*, John Wiley & Sons, Inc.
- De Vreese, C. H. and Lecheler, S., 2012, "News Framing Research: An Overview and New Developments", *The SAGE Handbook of Political Communication*, London: Sage Publications: 292-306
- Entman, R. M., 1993, "Framing: Toward clarification of a fractured paradigm", *Journal of Communication*, 43(4) : 51-8
- 藤田真文, 2007, 「フレーム分析再評価: 認知言語学と物語論の観点から」『三田社会学』12 : 32-42
- Gamson, W.A., and Modigliani, A., 1989, "Media Discourse and Public Opinion on Nuclear Power: A Constructionist Approach", *American Journal of Sociology*, Vol. 95(1) : 1-37

- Gamson, W., 1992, *Talking politics*, New York: Cambridge University Press
- Gitlin, T., 1980, *The Whole World is Watching*, Berkeley: University of California Press
- Goffman, E., 1974, *Frame analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Boston: Northeastern University Press
- 濱西栄司, 2017, 「構築主義と社会運動論：相互影響関係と回収可能性」『社会学評論』68(1)：55-69
- 樋口直人, 2014, 『日本型排外主義』名古屋大学出版会
- Iyengar, S., 1991, *Is anyone responsible?: How television frames political issues*. Chicago, IL: University of Chicago Press
- Kahneman, D., & Tversky, A., 1984, "Choice, values, and frames", *American Psychologist*, 39 : 341-350
- McCombs, M. and Shaw, D., 1993 "The Evolution of Agenda-Setting Research: Twenty-Five Years in the Marketplace of Ideas", *Journal of Communication*, 43(2) : 58-67
- 難波功士, 1993, 「広告研究における状況的パースペクティブ：E.Goffman“Frame Analysis”の検討から」『マス・コミュニケーション研究』42：179-193
- Neuman, W.R., M.R. Just and A.N. Crigler, 1992, *News and Construction of Political Meaning*, The University of Chicago Press (=2008, 川端美樹・山田一成監訳『ニュースはどのように理解されるか』慶應義塾大学出版会)
- 西城戸誠, 2003, 「抗議活動への参加と運動の「文化的基盤」：フレーム分析の再検討」『現代社会学研究』16：119-136
- 坂本佳鶴恵, 1989→2005, 「行為論への一視角：解釈的パラダイム（ゴッフマン・エスノメソドロジー）の可能性をめぐる」『アイデンティティの権力：差別を語る主体は成立するか』新曜社
- Scheufele, D.A., 1999, "Framing as a Theory of Media Effects." *Journal of Communication*, 49 (4) : 103-22
- Snow, D.A., R. E. Burke, S. K. Worden and R. D. Benford, 1986, "Frame Alignment Processes, Micromobilization, and Movement Participation," *American Sociological Review*, 51 (4) : 464-81
- 鈴木努, 2000, 「メディア・フレーム・アナリシス：イシュー連関の内容分析」『社会学論考』21：25-50
- Nelson, T.E. and Willey, E.A., 2001, "Issue frames that strike a value balance: A political psychology perspective" in Rees, S.D. et. al. eds., *Framing Public Life*, Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates
- 竹下逸郎, 2008, 『増補版メディアの議題設定機能：マスコミ効果研究における理論と実証』学文社
- 鳥谷昌幸, 2001, 「フレーム形成過程に関する理論的一考察：ニュース論の統合化に向けて」『マスコミュニケーション研究』No.58, pp78-93
- 鳥谷昌幸, 2016, 「メディアフレーム論の批判的再検討：ジャーナリズムと社会的意味」研究のための一考察、『法学研究』Vol.89 (5) : 1-50
- Tuchman, G., 1978, *Making news: A study in the construction of reality*, New York: Free Press (=1991 鶴木眞・桜内篤子訳『ニュースの社会学』三嶺書房)
- 横尾俊成, 2019, 「『札幌市パートナーシップ宣誓制度』の導入過程におけるSNSを介したフレーム伝播」『社会情報学』8(1)：65-79